

Is the moon made Of
Scarlet Cheese ?



目次

◆ 2 ◆	◆ 1 ◆
「カマリリヤの最後の血族」	「魔女と夜貴の同形三複」
15	2

◆ 1 ◆ 「魔女と夜貴の同形三複」
スリーフォールド・レディンヨン

霧の湖の畔に建つ悪魔の館——紅魔館。その名の由来のひとつでもある鮮やかな紅の屋根は、昨日からの雪に覆われていた。

半地下の館内から外に繋がる天窓も、張り付いた雪と霜が溶けて生じた水滴に覆われて曇り、夜半にも関わらず司書の使い魔が、バケツと雑巾片手に本棚の上を飛び回っては本の大敵である湿気取りに勤しんでいた。

ゆらりゆらりと揺れるランプの灯りの下。眼鏡のレンズ越しにちらとそれを見上げ、パチュリー・ノーレッジはとりとめもない思考に頭をゆだねる。

「……………」

わずかに埃の焦げる匂いにこぼ、と小さな咳を一つ。

深々と降り積もる雪に一切の雑音を飲み込まれ、図書館はいつも以上の静寂に満ちている。

一度、朝早くに晴れ間は見えたものの、再び昼から降り始め、夜半を過ぎてなおやむ気配のない雪は、このま

ま明日まで続くのだろうと思われた。悪魔の館が紅白斑に染まるなんて皮肉にも程があるが、さて。この主はそれを楽しんででも居るのだろうか。

気分ひとつで窓を潰したり増やしたり、使いもしない廊下を改築させたりと、館の見栄えに拘る自称ツエペシエの末裔の思考と言うものは良くわからない。

知識と日陰の少女が頁を繰り、

揺らめく灯りの下に、幾百月と積もった歳月が燦る。

見上げる事も叶わないほど巨大な本棚の傍らで、パチュリーの向かうテーブルには、何十何百という未読の書籍と、それと同じくらしい既読の本が積み上げられている。

他にも羽根ペンやインク瓶、付箋、埃の積もった文鎮、走り書きを集めたノート。さらには飲みかけの珈琲と日持ちのする砂糖菓子が詰められた瓶と、雑多なものが所狭しとひしめいていた。

「……………」

目元に澱む疲れにパチュリーは吐息をこぼし、顔を上げる。眼鏡越しにも重い視線は、眼の下にうつすらと隈を浮かべ、斜視に近いほど歪んでいた。

これで何日目の徹夜になるだろう。手にしたカップに口を付け、中身がすっかり冷えているのを見て、パチュ

リーは眉を潜めた。使い魔を呼んでお代りを用意させようかとも思うが、声を上げるのが煩わしい。

「……………んっ、……」

しばしの躊躇の後に、パチュリーはカップの底に残る焦げた泥水を喉に流し込んだ。

ぞつとするほどの悪魔のような冷たさと苦さだけを無理矢理飲み込んで、慢性の頭痛に痛むこめかみをそつと押し揉むと、再度開いた頁^{ページ}に顔をうずめる。

静謐な館内のあちこちには本棚の他にも未整理の書籍が無造作に積み上げられ、広大なはずの敷地を先も見通せぬほど複雑に入り組んだ、迷宮めいた姿に変えている。その姿はまさに、書籍の溪谷という形容が相応しい。

図書館の主であるパチュリーも知らないうちに、この蔵書はどこからともなく出現しては勝手に増えてゆく。転がる雪玉と同じように、知識というものは蓄えられた場所に自ずから集まろうとするものらしい。幻想郷随一の蔵書を誇る知識の蔵は、人の手など借りずとも周囲から同^{読まれざる本}属を掻き集め、その密度を上げてゆく。もはやそれはアカシヤの年代記を目指すひとつの意思と呼んでもいいのだろう。

知らぬものを知ろうとする意志。道半ばの理解を後世に伝えんとする遺志。文字とはつまるところ著者の生き

写しだ。まして、蔵書の多くが魔術書^{マジックブック}ともなれば尚更のこと、幻想郷のそれに自我が宿らぬほうがおかしい。

中でも稀代の貴書、奇書、稀覯本が多く身を寄せているここは、彼等にとっても居心地のいい場所であるのかもしれない。

そんな無数の本の森に埋もれ、独りひっそりと、至福の時間を過ごしていた少女のもとに、

「パチエ、いるかい」

言葉とともに、静謐な気配を乱すものがやってくる。

正面の大扉を手づから押し開けてやってきたのは、まだ十ほどにも満たない姿恰好の少女。傲慢にして強大なる吸血鬼、この館の主である永遠に幼き紅き月レミリア・スカレット。

500年を生きる紅魔の館の主は、自分の背丈の数倍をゆうに超える本の溪谷を羽ばたき通り抜けて、悠然とパチュリーの座るテーブルのすぐ傍らへと舞い降りた。

背中の羽根を畳む動作で、ふわりと舞い上がる埃に小さく顔をしかめ、

「まったく、一年中変わらないなここは。もうすぐ雪割りだというのに、相変わらず儼^{カビ}だらけ埃だらけで辛気臭い。何をサボってるんだ、咲夜は？」

本の保全のためパチュリーがメイドたちの立ち入りを

禁じていることを知らないわけではないだろうに、レミリアは鬱陶しげに牙を覗かせ、そんなことを口にする。

パチュリーは不快感も露わに、目の前に押し付けていた書籍からわずかに顔を上げ、眼鏡の奥からちらりとだけ読書の時間を邪魔しに來た友人の姿を見た。

「……館の主人自ら客人の気分を害しに來たのかしら」
「心外だね、親友の退屈を紛わせに身づから心を砕いて回る真摯な主に向かつて」

レミリアはそう言うのと、魔女の座る椅子の背もたれにひよいと飛び乗り、上下さかさまにパチュリーの顔を覗き込んできた。

小さなドレスの背中ではたばたと揺れる蝙蝠めいた羽根は、丁度よい暇潰しを見つけたと言わんばかり。まるで犬の尻尾ね、と胸中で呟いて、パチュリーは書籍の上に視線を戻す。

明らかに無視を決め込む様子の魔女に対し、しかしレミリアは気分を害した様子もなく、額に手をかざして館内を一瞥する。

「夜中くらい読書は自重したらどうだい。こんな暖炉ひとつない場所。蛭雪の功は足りてるだろう？」

「火は本が傷むわ」

吹雪いている表に比べれば確かに幾分か暖かくはあ

るが、微と埃の竄った図書館内の空調は快適というには程遠い。

卓上の小さなランプは、燃える陽炎のようなゆらめきをつくり、炎とは異なる白色の光で館内を照らしている。

知識の姓を持つ稀代の愛書^{ビブリオマニア}狂が、この図書館に求めるのは書籍にとって快適な環境であり、住環境などは二の次だ。暖かさに包まれて転寝を決め込むような快適空間は、叡智を求めるのにささやかな助力すら与えてくれないと、パチュリーは常々考えていた。

「先に身体を痛めておいて大した言い草だ。まあ、その格好じゃ寒いってこともないだろうが」

いつもの寝巻きにも似た服の上から、ふかふかのベージュのガウンを羽織り、毛皮のスリッパに足を突っ込んで万全の防寒体勢を取っているパチュリーを見て、レミリアは笑う。

「……冷え性とリウマチは魔女の職業病なのよ」

「いっそ毛糸のパンツでも穿いたらどうだい。大して歳を食ってもいなくせにやたら老成ぶりがるのは、餓鬼が背伸びしてるのと変わらんよ、パチエ」

くく、と口元に尖った牙を覗かせて、五百歳の吸血鬼はテーブルの反対側に腰を下ろした。積み上げられた書籍と卓上の品物を一緒にたにがちゃん、がちゃんと乱暴

に難ぎ払い、空いた本の隙間に肘をつく。

自分の居場所を乱暴に荒らされることに對し、本の縁から覗くパチュリーの視線はますます険しいものとなつてゆくばかりだ。

「百年來の友人の頼みだ、夜更かしのついでにお喋りにくらい付き合ってくれても良いだろうに。それとも、お気に入りの魔女仲間同士でなきや夜のお喋り会には入れてもらえないのかね」

「……………」

無言のまま、棘々しい拒絶の氣配を撒き散らす頑固な友人に、レミリアはもう一度苦笑する。

長らく彼女ひとりの席しかなかったこのテーブルにも、別の椅子が用意され、見慣れない私物が散見されるようになって久しい。病的なほど人付き合いを厭っていた過日の日陰の魔女にしてみれば、それが歓迎でなくてなんだというのだろう、とレミリアは思う。

「……………」

「まったく、頑固にもほどがあるね。——咲夜」

それでも沈黙を決め込んだままのパチュリーを見、レミリアは指を鳴らしてメイド長の名を呼ぶ。すると、すでにそこには、ずっと前からそこに控えておりましたと言わんばかりの顔をして、燭台を手にした十六夜咲夜の

姿があつた。

「紅茶を。ついでになにか食べるものも欲しいわ」

「^{かしこ}まりました」

咲夜が一礼してそう答えた一瞬後には、秒針が文字盤を刻む音を響かせ、すでに従者の隣に銀の配膳台が用意されている。

夜色の蝙蝠を描いたデザインの陶のティーポットに、濃紅の薔薇を象ったクツキート、ごく普通の狐色に焼けたクツキートの二皿がテーブルに並んだ。レミリアは従者の完璧かつ瀟洒な手際にふふんと鼻を鳴らす。

湯気の立つ琥珀色の水面に、ブラッディフレーザーを数滴垂らして整えられた紅い紅茶を口元へ運び、眼を細めて満足げな吸血鬼。

「パチュリー様もいかがですか？」

「そうですね」

咲夜に勧められて、本の魔女はそう答えはしたものの、顔の周りに押し付けた本から視線を上げようとはしなかった。

どうせこの完璧で瀟洒な従者の仕事はいつだって完全で、いつ口にしたところで紅茶は適温に保たれていることは自明なのだ。だから、これまでレミリアに對しても貫いてきたように、パチュリーは紅茶を楽しむことをあ

えて読書よりも優先させることはない。

「……咲夜、下がっていいわ」

「はい」

やれやれと呟いて、レミリアは従者を下からさせる。

静かに答え、再礼と共に今度はきちんと扉から退室してゆくメイド長。

じつと本を睨み続ける日陰の魔女を傍らに、レミリアはしばしクッキーと紅茶を楽しんだ。あどけない指先が紅色の焼き菓子をつまみ、二、三枚をまとめて紅い唇の奥へと齧り飲み込んでゆく。

あまり上品とはいえない乱暴な咀嚼音に、静寂と沈黙を愛する魔女が遂に音を上げたのは、それから程なくしてのことだった。

「ねえ、そこに居られると気が散るんだけど」

「居なくても同じだったろう。いつまで同じ頁を眺めてるんだ？ パチュエは」

「つくづく性格の悪い蝙蝠ね」

ぼそり、と呟くパチュリーに、レミリアはしてやったりと唇を歪める。

「酷い言われようだな。魔女を殺す退屈に付き合ってやろうと言うのさ。私がね」

「チェスの相手なら間に合ってるわ」

「スリフ・オールド・レディン・ジョン
千日手」しか選ばない泥試合はこちらからも御免だよ。やはり魔女どのの対戦相手は、無謀で蛮勇な人間が相応しい」

運命を読み操る吸血鬼と、それすらも手に数えようとする魔女が指し手となる盤上では、結局、初手で勝敗が決まる。問題はその一手を指すのに双方ひと月ばかり必要ということだった。

「それに、生憎だけれど蝙蝠相手に独り言を言うほど退屈もしていないわよ」

「その割にはやけに饒舌じゃないか」

くっく、と楽しそうに最後のクッキーの欠片を口に放り込み、レミリアは言う。

本当に邪魔ならば、パチュリーがわざわざ言葉など使わないことを知っているのだ。もっと直接的な手段はいくらでもあるし、使い魔に締め出させた方がいいはずだ。

……もつとも、それすら捻じ曲げるのがレミリアの能力ではあるのだが。

レミリアは笑いながら、焼き菓子をつまんだ指を舐めると、卓上にあつた瓶詰めに目をつけた。

赤、青、緑、黄、ミルクにそれらの色を溶かしたような星型の砂糖菓子が詰まったそれを掴み引き寄せると、蓋を封蝋ごと剥がし、中の金平糖を無造作に口に運ぶ。

「……成長期かしら、レミイ。小食は卒業したの？」

「やせ我慢してるのさ。パチェの機嫌を取る為にね」

今度は先刻よりもはつきりと、パチュリーが反応を示すのを見て、レミリアはがりがりと砂糖菓子を噛んで飲み込み、

「咲夜の紅茶もクッキーも嫌いじゃないが、こう毎日だと飽きもする。門番もこのところ雪続きで表に出るのが一苦労だと言っていたからね。この分じゃ、このところ随分喘息の調子がよろしいパチェのお喋りな舌も、さぞ時間を持て余しているだろうと思ったのさ」

「……何が言いたいのかしら」

「皮肉の解説するほど野暮じゃないよ」

牙を覗かせて笑う吸血鬼。

魔法陣、触媒、呪物、魔法具、遺物。補助の種々な手段はあれど、魔法の実践の根幹に関わるのは口頭による呪文の詠唱である。

チェスの早指しに近い概念の魔法戦においては思考の早さと同等以上に、正確な発音、卑語俗語慣用表現を含む文法、詠唱速度が魔力の多寡などよりもよほど重要な要素となるため、魔法使いは何よりも滑舌や発音を繰り返し学び、総じて饒舌で早口になる。命名決闘法においてもそれは変わらない。

なかでも、三精四季五行に併せた五声と陰陽六律の口訣をもつて、森羅万象の相生相剋、比和、相乗相侮の秘儀を操る七曜の魔法使いはとりわけ饒舌だ。……肺に懺さえ生えていなければ。

「……はあ。前置きはそれくらいいいでしょう。それでレミイ、いつたいなにを強請りにきたの？」

「物分りがよくて助かるね。それなりに真剣な相談だよパチェ？ 是非とも知識人の助けを借りなきゃいけないような、ね」

「そう。当てにしてくれるのは嬉しいけれど、早々と終わらせて一人にしてくれるととっても嬉しいわ。当てにしてくれないのが一番だけど」

「つれないね。百年来の友人に対して」

「その百年来、困り事を押し付けるか、窮して泣き付くかでもなければ貴方がここに来ることはないもの」

「これがその最初かもしれないだろう？」

「吸血鬼は平気で嘘を吐くから嫌ね。悪魔相手の方がよっぽど楽よ」

いい加減に辛抱の限界となり、パチュリーはとうとう本から顔を上げ、ぱたりと頁を閉じて脇にどける。眼鏡を外し、我儘な吸血鬼の相手をしているうちに額に寄った皺を揉みほぐして、

「貴方が持つてくる話は愚にも付かない与太話か、勝手放題の我儘か、実現不能な無理難題か、夢見語りの荒唐無稽か、あるいはその全部だもの」

「良く解つてるじゃないか。それを知恵と工夫でどうにかするのが知識人のつとめだろう？」

「客人を扱き使う理由にはならないわよ」

「パチエのものは私のもの。私のものは私のもの、さ。

偉大な格言じゃないか」

「いつから沙^{シエイクスピア}翁にかぶれたのかしら。吸血鬼のくせになまいきね、レミイ」

ふう、と吐息を挟むパチュリーがそれ以上言い返す様子がないのを見て、レミリアは本題を切り出す。

「地底の連中の話さ。パチエも白黒を付き合わせたんだから分かつてるだろう？」

「……………」

その一言で大体の内容を察したパチュリーが、露骨に渋い顔をするのを見て、レミリアはくくつ、と喉奥を震わせた。

「この間、例の地獄鴉とやらを見たよ。地面の底に這いつつてる連中が自前の太陽を持ったなんて、実に出来の悪いジョークじゃないか。なあパチエ？」

「なあに、私に核条約でも結んで来いというの？ 締め

上げるのなら咲夜にやらせたらどう？」

「話を急^せくなよパチエ。まあ、太陽が一つ増えたのはすこぶる気に入らないが、人工太陽が大人しく地下に引き籠^{こも}っているなら、紅魔館への宣戦布告は見逃してやるさ。なにしろ私は寛大だからね」

「大丈夫よ鴉は鳥目だもの。夜は表に出てきたりしないわ。……それで、まさか貴方まであの太陽が欲しいとでも言いだすつもりじゃないでしょうね、レミイ」

「そんな訳ないだろう、パチュリー・ノーレッジ。見損なうな」

吸血鬼は不遜に、口元に牙を覗かせて言った。

「欲しいのは月だ。月が欲しい。できれば満月がいいな」
「……………」

何が違うのよ、と頭を抱えたくなるのを辛うじて堪え、パチュリーは溜め息を飲み込む。

「……もうあるじゃないの」

「私だけの月さ。一年三百六十五日、二十四時間絶え間なく、私のためだけに輝き続ける月だ」

『私^{My Lord, Shinnigress Moon}だけのお月さま』？ 聞いていて恥ずかしくなるくらい乙女な台詞ね。……そんなものを、私につくれと言うのかしら」

「他の誰が出来るんだい？」

まるで子供のように、笑顔を浮かべてレミリアは言う。
500年を生きる吸血鬼とは言うが、要するにそれは
500歳の子供と同じことだ。不老不死の吸血鬼だろう
がなんだろうが、身体が育たなければ中身だつて伴うこ
とはない。レミリアの尊大さは、言い換えてしまえば子
供の我儘と変わらないのだ。

……それこそ、文字通り比類なき力を兼ね備えた、幼
い化け物の子供の^{チャイルド・プレイ}戯。

「今日の分の月^{インペリウム}阿片が足りていなかったのかしら、レ
ミイ」

「十分に酔っているさ、パチエ」

「……無理だ、と言つても聞かないわよね、貴方は」

「無駄なことをわざわざ聞くくらい調子がいいなら僥倖
だ、パチュリー・ノーレッジ」

だからそれゆえに、レミリアは畏れられる。まず常識
ならば考えもしないこと、求めもしないことを普通に実
行しようとするからだ。太陽が邪魔だからと霧を出し、
領土が欲しいからと月にロケットを打ち上げる。

幻想郷においての常識などあつて無きに等しいもので
はあるが、それでも周囲の迷惑を省みない彼女の行いは、
往々にして騒動の種となる。

力を持つ妖怪は、その力に、生きた年月に比して意欲

を、己というものを失い停滞する。幻想郷で最強に近い
妖怪、吸血鬼を名乗るくらいだからレミリアもその例外
ではないはずなのだが、彼女が停滞させているのは困つ
たことに外見に相応しい精神年齢だった。

「で、いつまでに出来上がる？」

話を始めただけですっかり成し遂げた気で居るレミリ
アに、パチュリーはどうとう堪えきれずに盛大に嘆息し
た。

「つくづく、長生きはしない方が得ね。……腐れ縁なん
て鬱陶しいだけ」

「つくづく、長生きはするものだね。持つべきものは友
人だ」

「……ねえレミイ。攻め落とせなかったから臆物で我慢
するなんて、傍から見れば滑稽よ？」

「本物が有り難がるほどのものでもなかったから、もつ
といいものを作つてやれと言つてるのさ。なんなら別荘
でも建てればいい」

多少の皮肉では応えないことを確認して、パチュリー
はレミリアが本気で言っているのだということを改めて
理解する。彼女が本気でないことなどほぼ有り得ないの
だが、万一の可能性を確かめたくなる気分だった。

期待に目を輝かせている紅く幼き永遠を見やり、興味

がなくなるまで付き合っておくのが一番賢いやり方だと、パチュリーは腹を括ることにする。

「月、ね」

卓上の本から一冊を抜き出し、パチュリーは手短に呪文を呟いた。

即座に展開された小さな魔方陣の上に、丸い球体が出現する。滅多に机を離れることをしない彼女にとって、持ち物を手元に引き寄せる転送の魔法は手足のように使用頻度の多い魔法のひとつだ。

半弧のアームに支えられ、ぼんやりと薄い輝きを放つ球体は、白と薄い灰色で複雑に塗り分けられており、表面には小さな隆起といくつもの小さな穴が穿たれていた。

「……なんだい、これは」

「地上から見える月の表側を再現した形だね。月球儀」と言うそうだけど」

「ふん。貧相な岩の塊だね。海も都もない」

「そうね、ついでにウサギも住んでいないわ。これはあくまで月の象形をなぞっただけの模型。貴方や私達の知る月とは違うわ。幻想郷から見える月はこのではないの」

「……私たちにとっての“現実”の月か。で？」

アームの中に納まる月の模型を、吸血鬼の紅い爪が引っ掻く。重力を無視してぐるぐると回転を始めた月球儀を一瞥し、レミリアはパチュリーに先を促す。

「……自分専用の月なんて代物、持てればそれこそ絵本に載るような大魔女の仲間入りでしょうね。月齢も潮汐も気にせず、秘儀参入も大儀式も、不老不死も黄泉還りも、いつでもどこでもなんだったて思いのままよ」

「だろう？ 実に私に相応しい所有物じゃないか」

「ねえ、レミイ。私思うのだけど」

ふう、と湯気を立てる紅茶に口をつけ、パチュリーは言う。

「吸血鬼って、もしかして月から来た化物じゃないのかしらね？」

「なんだパチェ、ついに私までエイリアン扱いか？」

「だって、そうでも思わなきゃやってられないわ。貴方の拘りかたって異常なもの。この前の月ロケットでチーズの塊でも見つけてきたのかしら？」

「パチェの宇宙船は着陸前に壊れたからね。着地の地震波を測れなかったから、地面一面がチェダーチーズだったことに気付かなかったのさ」

レミリアはあの惨憺たる結果に終わった月面侵略計画を、まるで手柄のように語る。吸血鬼と言うのはよほど

楽天的かあたまのわるい生き物なのだな、とパチュリーは再度思い知った。

「馬鹿げたことを言わないで、レミイ。いつからうちの館の主はネズミになったのよ」

「さてね。なんなら次の週末にまたロケットで食べに行くかい。今度はパチェも一緒にね」

「祝日はまだ先よ、ホリデイ、自称発明家さんミクスクリ・ウオレス」

「くつく、それじゃあ咲夜はビートル犬か」

自分のジョークに吹き出して、レミリアは愉快そうに手を叩く。

「……つまり、パチェはこう言いたいわけだ。あんなものを欲しがらなくてんでもない、と」

「ええ、貴方の月がどこに行つたのなんて、私の知つたことじゃないわ」

「出来ないとは言わせないさ、パチュリー・ノーレッジ。

月阿片くらい田舎のルウガルウ人狼でも作る。スペルに月を封じてみせる七耀を識る魔女に、月を創れないはずがない」

「……ご評価いただけるのはまことに結構だけれど。私も天井に逆さまに張り付いて眠れば、少しはその気持ちかわかるのかしら」

「くだらない冗談は2度までだよ、パチェ」

「さすが悪魔。残機が一つ少ないのね。当主としては右

の頬を打たれたら左の頬を差し出すくらいの度量が欲しいものだけだ。……まあいいわ。このままじや本当に
同形・三倍・複だものね」

頃合いか、と判断したパチュリーは静かに瞑目し、頭

上の窓を拭いていた司書の使い魔を呼び寄せた。

「お呼びですか、パチュリー様」

「そこはもういいわ。ワイオレットのエリクシルはまだ残つていたかしら」

「はい。まだ在庫がいくつか」

「じゃあ持つてきて頂戴。あと他に……」

パチュリーの指示に従つて、小悪魔は小さな羽根をばたばたと動かし、書架の奥へと走り去つてゆく。

この図書館は同時に、魔法使いパチュリー・ノーレッジの広大な工房でもある。パチュリー自身は薬草も茸もあまり使うことはないが、あちこちから取り寄せた呪物、触媒、魔法薬などは多く貯蔵されていた。実験場の他にも本格的なマジカル・ロッジも築かれ、大規模な集団儀式まで行える設備が供えられている。

およそ、魔法の理論、実践において不自由はなく、パチュリーの二つ名である『動かない大図書館』の所以でもあった。

そうして待つことしばし、やがて小悪魔がいくつかの

瓶を抱えて戻ってくる。

指示のあった葦のエリクシル、丸フラスコにコルクと蜜蝋で封じられた無色透明の酒精、枸橼のエキスをひと瓶、そして冷却機いっぱいの細かく砕かれた氷。

卓上に置かれた瓶のラベルを順に確認し、最後のひと瓶でパチュリーは手を止めて眉をしかめる。

「……小悪魔。これは枸橼じゃなくて佛手柑よ」

「あ」

「まだ残っていたはずだから袋ごと持ってきてなさい」

誤りの指摘を受け、小悪魔はすみませんと頭を下げる。慌てて倉庫に戻ってゆくその背中に、動かない魔女は吐息をひとつ。

息をひとつ。

「本当に、本の管理以外の覚えは悪くて困るわ」

「主に似たんだな」

「当然よ。そのために躓けているんだから」

レミリアは透明なフラスコに溜まった無色透明の液体にこつん、と爪を当て、

「それにしても、うちの魔女どのは病弱なくせに酒豪だったかね。宴会では酔い潰れている所しか見た覚えがないけれど？」

「愚問ね。これら全ては大エリクシルへと至る錬金術の大願。生命の水は言うに及ばず、妖霊も精霊も、魔法

の初歩で学ぶ必須科目よ」

魔法使いが捕え使役する幾千幾億の悪魔のうち、地水火風の四大元素を集めて連続蒸留した、精度の高い上位のものを精霊と呼び、さらにそれを蒸留器で単式蒸留したものが妖霊となる。

妖霊は火と風から作られた超存在で、人よりも優れた知力、体力、魔力を持ち、真名を知る主人に忠実に従う、目に見えず触れない超常の存在だ。

中でもリウマチを防ぐ杜松の実を加えて蒸留した精霊は、水の元素を一切含まないため、特に乾いた妖霊と呼ばれる。

パチュリーはその乾いた妖霊を封じたフラスコを手に取り、ランプの炎に透かして中身を確認する。

「過去、多くの錬金術師がこぞって王侯貴族の気を引くために液体の宝石を創り上げたけれど。ついに錬金術の真髄に辿りついて大エリクシルの醸造に成功したという話は聞かないわね」

「生命の精髄。……それで賢者の石か」

「ええ」

大エリクシルを原型とする賢者の石は、一説では血のように紅く、液体とも宝石ともつかぬ輝きをしていたとされる。長き研鑽の末、まさにそれを手にした知識の魔

女はくすりと微笑み、枸櫞^{シトロ}ひと袋を加えてテーブルの上に揃った材料で、手際よく調合を進めてゆく。

まずは洋銀筒^{シヤイカ}に砕^{クラ}いた氷^{シユド・アイス}を八分目。そこに忠実なる乾いた妖霊^{ドライ・シン}Logと、薫^クり高き堇^{クレム・デ・ヴィオレット}のエリクシル^{エルクシル}と、新鮮な搾^{サツ}りたての枸櫞^{シトロ}のエキス^{エキス}を加えて封じ込め、蓋を閉じて十五回の搅拌^{ステア}。

ひと振りと共に洋銀筒^{シヤイカ}の表面に霜が降る。銀の上に冷えた雪の色合いが広がると共に、元来は別の要素が、溶け合い均一となつて妖霊^{シン}を基本に結びついてゆく。

19世紀に主流となつた、氷を用いる冷製混合^{コールド・シェイク}。百年を生きる知識の魔女には最も親しみのある調合だ。

「……これで完成」

小悪魔に用意させたグラスに中身を注ぎ、これで全ての工程が完了。出来上がったのは、馥郁^{フツツ}たる堇^{スミレ}の香りに乗せた薄紫色の鶏尾^{シヨート・カクテル}酒^{アルコール}だった。

黎明の空を封じこめたような、かぎりなく薄い雪の灰空に、わずかな赤と鮮やかな青を垂らした色合いが、グラスの中に閉じ込められる。

「青い^{ブルー・ムーン}月。月齢と日齢の差が生む魔法ね。レミイは紅い月を好むけれど、これは蒼色の月。中でも年に二度の青い月が観測できるのは、百年に一度起こるかどうかの天文的事象なのよ。今年の一月末^{ガメリオ}に、ちょうどその月が

昇るわ」

日と月の要素を絶妙に配合し、小さなガラスの器の中にそれを再現してみせたパチュリーの手元から、レミリアはカクテル・グラスを摘み、掲げるようにして中を透かす。

ゆつくりと動く蒼紫の液体の中で、氷の細片が薄い輝きを放っていた。それに魅入る吸血鬼に、七耀の魔女は唇の端をもたげて続ける。

「百年に一度の滅多^{ゴト}にない出来事^{コト}。これがレミイには相応しい月じゃないかしら」

「……へえ。それで、パチエはこれを飲ませて私の口も一緒に封じるつもりかい？」

堇^{ヴィオレット}は神経毒だ。人の手の入った山野に群生する青と紫の花が煮詰められた精髓^{エリクシル}は、その甘く豊かな香りと裏腹に、わずか1滴^{ドロップ}で人を死に至らしめる。

まして動かない大図書館の手で合成され、グラスに封じられた『夜明けの空』の複合精霊^{カクテル}……甘美ながらも鋭く強靱な頹廢^{アレル・ゴア}の酒精^{アルコール}は、不死身の吸血鬼にすら害を及ぼしうるだろう。

「ええ。吸血鬼も魔女も、殺しうるのは毒ではなくて退屈、でしょう？ レミイ」

「——違うない」

観念したように笑みを覗かせ、レミリアは掴んだグラスをくい、と傾けた。白い喉が、こくりこくりと動いてグラスの中の黎明の空を飲み込んでゆく。

空になったグラスを放り、レミリアは軽く肩をすくめてみせた。

「やれやれだ。魔女どのはお疲れのようだし、私も夜寝でもするとしようかね」

「ええ、お休みなさい、レミイ」

「……ああ、おやすみだ、魔女どの」

すっかり青い月の毒にやられたな、などとわざとらしく欠伸まで挟み、永遠に幼き紅き吸血鬼は無数の蝙蝠になつて姿を消す。

我儘な館の主からようやく解放され、ふうと大きくため息をついて、パチュリーは倒れ込むように椅子に背中を預けた。

「お疲れ様です、パチュリー様」

「……弁^{わきま}えない友人を持つと苦労するわ」

ほんの1時間ばかりのやり取りでやけに憔悴した様子のパチュリーを案ずるように、小悪魔は淹れたての珈琲のお代りを差し出した。

「でも、レミリア様、あんなに粘つてたのに、最後はやけにあっさりお帰りでしたね？」

銀の盆を胸に抱えて首を捻る小悪魔に、パチュリーはああ、と頷いて、

「青い月は薔薇の品名でもあるし、瑠璃^{ルリ}茉莉^{マリ}の別名でもあるけれど、他にもう一つ意味があるわ。知っているかしら？」

問われ、首を左右に振る小悪魔。

「そう。なら覚えておきなさい。」

——『出来ない相談』と言うのよ」

そう言つて、動かない大図書館はどこかつまらなそうに火傷するように熱い珈琲をひと口吸ると、戻ってきた静寂の中で読書を再開した。

◆ 2 ◆ 「カマリリヤの最後の血族^{クラ}」

群青と橙を混ぜ合わせた空を、ごう、と硬く鋭い風が吹き抜けてゆく。

眼下一面に広がる草原には、白銀の新雪が深く積もり、あらゆる生命の気配の耐えた冬寂の装いを見せていた。

遠く見える山の端はまだ薄明るく、なお残る陽光の残滓を漂わせている。夜と言うにはまだ早い時刻。吸血鬼が日傘もなく空を行くには、少々危険な時間帯だ。

「ねえ、どこまで行くの、お姉さま？」

「……そうね、この辺りでいいわ」

頬にちりちりとむず痒い陽の名残りを感じながら、レミリアは妹のフランドールと共に、雪の上で翼を緩める。

「……ふぁ。まだ眠いわ」

細く閉じた目を擦りながら、処女雪の上にとすんと脚を下ろすフランドール。とくに最近是比较的規則正しい睡眠をとっているフランには、まだこの時間は早起きと言ってよい時刻だろう。

雪深き一月末^{ガメリオ}のこの日、二人の吸血鬼姉妹は、まだ日の沈まない時刻に早々とベッドを出た。

パチュリーの予言に拠れば、今日の日没とともに百年に一度の蒼い月が見られるはずだという。その青き月の月光浴という名目で、レミリアはフランを屋敷から連れ出していた。

紺色の真新しい夜空のなか、姉妹の吐息は美しく白い。さく、さく、とほんのわずかに音を立てる真白い雪は、まるで一面の粉砂糖のよう。

猫を模した帽子にマフラー、手袋、分厚いコート、さらには膝下までの雪割りブーツ。万全の冬支度の装いで、吸血鬼姉妹はそろってぬいぐるみのような有様だ。これらの衣装は誰あるうメイド長自らの手によるもので、揃えるためにあちこちを奔走したらしい。

仕度を終えたときに咲夜がやけに満足げな表情だったのを思い出し、レミリアは白い息とともに独白する。

「……あれで咲夜も凝り性だからね」

「なにか言ったかしら、お姉さま？」

「いいえ、なんでもないわよフラン」

振り返るフランドールに答えて、レミリアは背中の羽根を折り畳む。

澄んだ空気の夕空には、けれど細かな霧の結晶が散つ

ていて、羽先もすっかり冷たくなっていた。二重になっているコートの合わせ目に羽根をしまい込み、レミリアは雪の上に歩を進める。

分厚い防寒着は同時に、まだ残る陽光の残滓から姉妹を守る意味もあった。

日傘一つで防げるような弱点ではあるものの、従者を伴わない外出にメイド長はあまり良い顔をしない。まして姉妹二人だけの散歩とあつては、咲夜の気の揉みようはひとしおだった。

「……まさか、ついて来てたりしないだろうね」

嫌な想像を自嘲と共に振り払い、レミリアは先を行くフランドールに声を掛ける。

「素敵な夜ね」

「でもこんな厚着じゃ、月光浴なんて気分じゃないわ、お姉さま。なんだか暑く苦しいし、それに邪魔よ」

言うなりフランは邪魔そうに首元を埋めるマフラーを引っぱがし、そこいらに放り捨てると、続けて躊躇なく伸ばした爪で手袋も千切り取ってしまう。

「はあ……」

清々したとばかりに冬の寒さの中に大きく伸びをするフランドール。苦笑しつつレミリアはそんな妹の無作法をたしなめる。

「はしたないわ。風邪を引くわよ、フラン」

「あら。地下牢はもともとと寒かったもの。こんなものぜんぜん平気よ」

「そんなものに閉じ込めた覚えはないわ」

「ひどいわ、自分のしたことまで忘れちゃったの？ お姉様」

くすくす笑い、フランドールは猫模様の帽子まで取り払うと、片結わえの金髪を夜闇の中に躍らせた。

薄暮の空にきらきらと輝く美しい髪も、小さな背中ではやらしやらりと打ち鳴らされる骨組みだけの畸形の翼と、それを彩る七色の宝石も。

その心の容^{かたち}を体現したように歪^{いびつ}な姿形は、悪魔の妹に相応しく、姉^{レミリア}のものとはまるで違っている。

——気のふれた妹。

それが、世の悪魔^{フランドール・スカレット}の妹への評価だ。

その感情に好悪は定まらず、是非の境も曖昧だ。大好きと微笑んだ唇で妖精メイドの眼窩をえぐり、つまらないと引き裂いた血塗れの指先で、いとおしげに怯える獲物を撫で、幼い愛を示す。

多くのものが扱いかね、畏れ、恐れ、怖れて遠ざける、それがレミリアのたった一人の妹だった。

ゆるりと風が吹き、空に闇が満ちてゆく。

わずかにほの白い西の端とは反対側、東の深い雲間から、静かに美しい深淵の月が顔を覗かせる。

「見てみなさいフラン。百年に一度だかの青い月よ」

年長者の貫録を見せつつもそちらを振り向き、厳かに告げるレミリア。

だが、

「……でもお姉さま、全然青くないわ」

「本当ね」

フランの指摘通り、そこに姿を現した月は確かに真円こそ描いていたが、パチュリーの語ったような蒼い月とはまるで違う、いつも通りの普通の満月だ。

期待外れの月に、フランドルが口を尖らせる。

「ねえお姉さま、これじゃつまらないわ。ぜんぜんいつも通りよ？」

「——パチェめ、適当なことを言ったな」

舌打ちをして不快な気分を顕わにするレミリアだが、それで月が色を変える様子もない。

フランドルはすでに百年に一度の青い月には興味を失っているようだった。

「……蒼い月だっていうから楽しみにしてたのに。あーあ。やっぱり駄目よお姉さま。こんなお屋敷にいるのと同じ。とっても退屈だわ」

そう言うと、フランはコートの胸元を止めるボタンを引きちぎり、粉々にして雪の上に放り捨てた。藍の空の下に、透けるような金髪がふわりと夜気を囁んで膨らみ、縦に開いた紅い魔眼が輝きを増す。

そのまま、フランドルは夜空に浮かぶ銀盤へと白く細い指先をすうと伸ばしてゆく。小さな手のひらは何かをつかむように拡がり、紅い爪が何かを握りしめるように折り重なって——

ぱちん、と小さな音が響いた。

「フラン」

耳元で名を呼ばれた妹がきょとん、と眼を瞬かせる。小さく握りしめられた妹の手のひらから、レミリアの右腕だったものが紅い霧になって散ってゆく。

肘から先を『破壊』された自身の腕にわずただけ眉を歪め——レミリアはフランドルの鼻先を翼の先でくすぐった。

「ふあ？」

「いけない子ねフラン。そんなはしたないことは、してはいけないと教えたでしよう？」

「……ずるいわ、お姉さま」

口を尖らせて、再度手のひらを握ろうとする妹の腕を、レミリアはそつと翼で押さえ込む。

「駄目よ。フラン。あの月は私のモノだから、お前には壊させないわ」

煌々と輝く、天頂の月にたどり着いた吸血鬼は、この世でレミリア・スカーレットただ一人。

だから、こうして夜を照らすあの月は、そこに足跡を刻んだ、たった一人の吸血鬼の所有物なのだ——と。彼岸に尊大にレミリアは微笑み、妹の狂気を論ずる。

「どうしても欲しいなら、フランも月まで行つて来ればいいのよ」

「……もう！ 本当にお姉さまって欲張りね。なんでも独り占めしてばかり。咲夜も、おやつも、玩具も、お屋敷も、お友達も！ 昔っから、私にはなんにも分けてくれないんだから！」

「そうね。フランが一人前のレディになったら、考えてあげるわ」

「……むー。私、とってもお行儀のいい子よ？」

ふくう、と頬を膨らませ、心外だと抗議するフラン。肘から下を消失したレミリアの右腕は、なおもその断面からじわじわと白い灰に変わり、夜の風に静かに溶け崩れてゆく。

月下にあつてすら再生も効かないまでに、存在根源から徹底的に姉の腕を吹き飛ばしておきながら。フランは

そんなことに微塵も構う様子をみせない。

なぜ咎められたのか、その理由もわからないまま、悪魔の妹は頑固な姉に無邪気な反抗を続けていた。

「ねえ、聞いているのお姉さまったら！ 私はもう立派なレディなのよ？」

「……そうね」

永遠に幼き紅き月——そう呼ばれるレミリアだが、妹のフランドールはそれより5歳幼い永遠だ。

幼いまま不死となったフランの狂気は、おそらく癒えることはない。ツェペシュの末裔の妹は、壊れた心から産声を上げている。いかな不死の吸血鬼の再生力と云えど、その「はじまり」から壊れていたものを治すことはないのだ。

そして、レミリアよりも幼いままの吸血鬼フランドールが、自身の歪みを理解することは生涯無いだろう。

だが、と。レミリアは思う。

確かに妹を扱いかねているものは多い。レミリア自身、なかば幽閉のように扱っていた時期もある。けれど、月下にあつて、理性的な振る舞いをする吸血鬼は、果たして化物と呼べるモノなのだろうか、と。

幻想郷において、吸血鬼はレミリアとフランドール、たった二人の紅の姉妹だけ。他に比べるものはなく、な

らば本当に狂っているのはどちらだろう。

ふたりきりの血族^{クワン}で、どちらが正しい吸血鬼の在り方なのか、それを区別する方法は、どこにもない。

だからレミリアは月を好んだ。

人妖揃って狂気を許される、月狂^{Moon Mad}条例のもとでならば、正気と狂気の境目すら曖昧に霞む。月下にあつてこそ、悪魔の妹と呼ばれるフランドールは、十三の夜の血族が開く夜会^{カマリヤ}への参入を許されるのだ。

……もつとも、そんな催しはここ数百年、一度も開かれては居ない。招くべき相手も、集うべき場所も、もはや東の果てのこの地にはない。

レミリア・スカーレットは、誰一人として学ぶ相手を持たない吸血鬼^{絶対の強者}として幻想郷にやってきた。永遠に永き夜の中で、たつた二人だけの姉妹、たつた二人だけの血族^{クワン}の、悪魔^{アンデッド}の妹のたつた一人の姉として。

だから。たとえその答えなど分からなくとも、運命の末など見えなくとも。姉として、幻想郷の吸血鬼のただ一人の先達として。不出來な妹を導き、共に有り、この血を繋いでゆかねばならない。

それが紅魔館の主、^{スカーレット}紅の長姉の務めなのだ。

「……辛いところね」

胸に残る小さな棘とともに、レミリアはひとり独白し

た。苦い呟きは、白い結晶へと変わってすぐに姿を消す。

「——お姉さま。ねえお姉さま、あれは何？」

いつの間か、フランは空を仰いでいた。裸の指先が示す先、山の端がわずかに途切れる地平線。そこから、幾本もの青白い光の柱が天に向けて立ち上がっている。

まるで銀河を貫く地上の輝きが、夜闇を裂いて空へと昇っていくかのように。

「天気輪の柱ね」

^{ライトニング}光柱。夜空に舞う氷の結晶に、月や太陽、あるいは街の明かりが反射して生まれる現象だ。

「……すてきね」

天を衝く光柱のきらめく空の下。

笑顔を覗かせたフランドールは弾かれたようにレミリアの傍を離れ、雪原を走り出す。

「ねえ、お姉さま！ 蒼い月は見れなかったけど、でも、冬って素敵ね。こんなのはじめてよ、お姉さま！」

溶けていれば吸血鬼の身体を碎き押し流す流水も、白く凍っていれば害を成さない。静かに舞い散る雪の下、真白い雪原をくるくると舞う妹を見、レミリアは静かに目を細めた。

が、そんな風に達観した風を装っていられたのも束の間。ぱしん、と飛来した雪の塊がレミリアの顔にぶつか

つて散る。

「……フラン？」

「ほら、とつても冷たいわ！ お姉さま！」

怒気とともに目を見開いたレミリアの顔に、さらに誘導弾の追撃が命中。ひりひりと冷たさに痛む顔を、レミリアは怒りを堪えて拭う。

「あははっ、お姉さまったら弱いよね！」

「……フラン、待ちなさいっ」

「嫌よっ」

ペー、と舌を出して逃げる妹に、レミリアはどうとう500歳の年長者の貫録もかなぐり捨てて、足元の雪を掴んだ。白い塊を渾身の力で握り込み、走る妹めがけて全力の一投を投げつける。

ぎゅうん、と夜を割いて加速する白の弾幕が、放たれた神の槍のごとく、ずがん、と近くの枯れ木を穿つ。

「どこ狙ってるのかしら、お姉さま？」

的外れの一撃を見てけらけらと笑うフランだが、その直後。揺れた梢からずると滑った雪の塊が、どこかかと悪魔の妹を押し潰していた。

雪に埋もれた下から羽根を突き上げ、フランは白くなつた金髪をぶるぶると左右に振る。

「ぶあっ!？」

「ふふ。運命どおりね」

「もおつ、ただの偶然のくせにつ。いいわ、今度こそちゃんと当ててあげるんだから！」

「出来るかしら？ いいことフラン、姉より優れた妹なんかいないのよ」

足元の雪を蹴散らし、飛び交う雪玉の応酬は、そのまましばし続いた。やがて弾幕には接近戦も混じり、二人は転がり、絡み合い、もつれるように雪原を駆け回る。

互いの繰り出す弾幕の中、いつしか姉妹の顔は、見紛う程に同じ笑顔へと変わってゆく。

……そして、何度目かに撃ち合った雪玉が、見事にお互いの残機を、ほとんど同時にゼロにして。

レミリアとフランは、そのまま仰向けに、ぽすんと乱れた雪の上に寝転がる。吐き出す白い息は、まるで蒸気機関の吐き出す汽笛のよう。

「……っ、私の、勝ち、ねっ」

「ちがうわ。コンティニュー、するのは、お姉さまの、ほうよっ」

二人とも、すっかり息も荒く、頬も赤い。見上げれば月はいつしか天頂近くにあり、その円らな輝きで白い雪原をきらきらと照らしていた。

焼けた鉄のように火照った身体を、寝そべる雪の冷た

さがゆつくりと醒ましてゆく。

「くしゅつ」

可愛らしいくしゅみの音に、レミリアは身を起こした。元気にはしゃいでいたフランドルだが、手袋も帽子もマフラーも放り出し、コート一枚で走りまわって、さすがに寒さを覚えはじめていたらしい。

ぶる、と小さな身体を震わせ、手のひらに白い息を吐きかける妹の元に、レミリアは歩み寄り、手を取ってその小さな身体を起した。

「フラン、いらつしやい」

「？」

首をかしげる妹のコートについた雪を払い、多少強引に背中羽根を押し込んで、拾っておいた帽子をかぶせ、残っていた自分の手袋の片方を付けさせる。

「ふわ？」

目深にかぶされた帽子のせいで目の前が見えなくなっているフランの首元に、レミリアは自分のマフラーの端を巻き、身体を寄せた。

「ほら、手が凍えてしまうわ」

左手に繋いだフランの右手を、そのまま自分のポケットの中へと招く。

「あつたかい……」

背中羽根を上機嫌に揺らし、手袋の手を頬に押し付けて、ふにやあ、と表情を蕩けさせる妹に、レミリアは己の胸奥で高鳴る鼓動を感じる。

吸血鬼にとつてなによりも優先すべき己の血脈、それが脈打つ鼓動は、何をおいても信じるべきものだ。

蒼い月がなくとも、月がチーズで出来ていても。今はこうすべきだと、レミリアは己の『血』で確信する。

「さあ、そろそろ帰りましょうフラン。咲夜がおやつを用意して待ってくれているはずよ」

「本当!? 私、チーズケーキがいいな。真つ赤な**ブラッドベリー**のジャムが乗ってて、きらきらの月**ムーンバニラ**もたくさん振って、まるごと全部食べるの!」

手に入らないのだからと、簡単に月を壊そうとした狂気も、まるで嘘か幻のよう。あどけない少女のように笑うフランに、レミリアは少々呆れてしまう。

「……やれやれ。欲張りね、フランは」

同じマフラーを巻きながらでは、二人が並んで羽根を動かすには少々窮屈だった。

だから、レミリアは右の羽根だけを広げ、フランの羽ばたく呼吸を見計らって翼を動かす。連なる一対の羽根で、寄り添うようにして空を飛べるように。

しんと冷えた夜の空は心地よく、雪原を眼下に、ひら

ひらと舞う風花は月明かりを点して淡く輝く。

「あ、でも……お姉さま？」

白い雪片を追いかけて摘もうとしてはしゃいでいたフランだった。ふと声を落とし、姉に着けてもらった手袋の指をぐっばと握りしめて、不安げな表情を覗かせる。

「手袋、破っちゃったけど——咲夜、怒るかな？」

「大丈夫よ。一緒に謝ってあげるわ」

きつとそれが、姉のつとめでもあるのだろう。

そう思い、500年の生涯の中、たった5年分だけの年長者の背伸びをして、レミリアはフランにそう告げた。

……すると。

「お姉さま、だいすきっ」

ぱあ、と顔を輝かせ、フランはぎゅっ、とレミリアの身体に抱きついてきた。寄せられた妹の顔が、驚く暇もないくらいに近づいてくる。

「……………!?」

咄嗟の叫び声は、小さく寄せられた唇で途切れ。

寄り添う身体のコートのポケットの中で、重なり合う指先が絡み合った。

「……………っ、」

壊された腕が引きつり、翼の動きもぎこちなく乱れて、ふらりと姿勢が傾く。ぎゅう、と、まるで大事なものを

押し包むように力を込めて抱きついてくる妹の軀がレミリアの自由を奪い、崩れた体勢のままに、二人は宙を墜ちていた。

ざん、と雲を割り、風を裂き、白い霧を線のように後に引いて、はるか上空から地面の上まではわずか数秒のこと。どさ、と雪の上につかつた衝撃よりも、さらに大きな驚愕で、レミリアは目を見開いていた。

「……………フラン」

「えへへ」

ちろ、と唇に残る唾液の湿り気に言葉を飲み込む。

声を上げる余裕もなく。仰向けになった姉の上に、馬乗りになり掛かったフランドルが、再度小さな唇を重ねてくる。

「……………ん、っ」

唇に触れる、とろけるような熱と柔らかさに、ぐらりとレミリアの頭が揺れた瞬間。突き立てられた妹の牙が、鋭い痛みと共にぶつりと皮膚を噛み切っていた。

熱を持って甘く疼く唇を濡らす血を、熱くぬめる妹の小さな舌先が、やけに巧みに蠢いて舐めとってゆく。

恋する乙女のように頬を染めて、吸血鬼^{ヴァンパイア・キス}の接吻に陶然となっている妹を。

レミリアは、忘我のままに受け入れていた。

「うふふ。上手になったでしょう？ いっぱい練習したのよ、お姉さま？」

レミリアの血で紅に染めた唇を三日月のようにして、悪戯っぽく笑うフランドール。

「練習って、相手は誰？」

「秘密よ、お姉さま」

微笑む妹に、レミリアは頭を抱えたくなる。片腕がなく、右手も塞がっているのに、できる腕は余っていないかったが。

「……ああ」

だから代わりに、レミリアは呻く。

吸血鬼の血を吸いたがる吸血鬼なんて——

「やっぱり、お前は気が触れてるのね」

「ええ。もちろんよ。お姉さま」

とびきりの笑顔で身を寄せてくるフランドールに、も

はやレミリアは返す言葉もない。

空には相変わらず、いつもと同じ月が輝き、雪の上に

重なる紅の姉妹を照らしていた。

(了)

手の上ならば尊敬のキス。
額の上ならば友情のキス。
頬の上ならば厚意のキス。
唇の上ならば愛情のキス。
脛の上ならば憧憬のキス。
掌の上ならば懇願のキス。
腕と首ならば欲望のキス。

……さてそのほかは、みな狂気の沙汰。

フランツ・グリルパルツァー 『接吻』

【あとがき】

新年明けましておめでとうございます。はじめまして。そしてお久しぶりの方には、今年もどうぞよろしくお願ひいたします。

お手にとつて頂きましてありがとうございます。銅おりはと申します。

本サークル7冊目のSS本となる『Is the moon made of Scarlet Cheese ?』をお送りしました。

レミリアお嬢様の余人には窺い知れない苦労を中心に、紅魔館の人妖模様を描くお話となりました。そして出番のなかった美鈴には申し訳ない限りです。

作中についていくつか補足をしますと、『馬鹿げたこと』を意味する『月がチーズでできている』というのはかなり一般的な言い回しで、それを前提にしたジョークや寓話も数多くあるようです。作中の「ウオレスとグルミット」なんかはその最たるものですが、月着陸船の着陸の衝撃から月の密度を計算すると、どんな岩石よりも小さく、チーズとしか思えない値となる——というような論文まで実在するほどです。

ダウザーの小さな大将に代わって、幻想郷のチーズが

どこへ行ったかを考えてみるのも面白いのかも。

また、作中のブルー・ムーンのレシピは一般的なものを参考にしています。この黎明色のカクテルには『出来ない相談』の他にもう一つ意味がありまして、そちらを踏まえて頂けるとパツチェさんのお嬢様への真意が伝わるかもしれません。

さて、そろそろ紙幅も尽きてまいりました。拙い部分は多々ありますが、少しでもお楽しみいただければ幸いです。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願つて。

「Is the moon made of Scarlet Cheese ?」

発行 平成22年1月17日 「紅のひろば3」

オルハザカサンパンチ
折葉坂三番地

あかがね
銅おりは

<http://oruhazaka.blog28.fc2.com/>
<http://members.jcom.home.ne.jp/oriha/index.htm>



東方 *project* FanBook

発行：折葉坂三番地

H22.1.17